

安東沈君作集

第一卷

安東次男著作集
第八卷

青土社

安東次男著作集 第八卷

© 1975 Seidosha

昭和五十年二月十五日印刷

昭和五十年二月二十八日 限定一〇〇〇部発行 0390—900013—3978

定価 三九〇〇円

著者 安東次男

発行者 清水康雄

題字 加藤楸邨

発行所 青土社 東京都千代田区西神田一—三一—三 山田ビル (電)二九二—七〇七六

振替東京 192955

印刷所 大盛印刷

製本所 美成社

口絵写真撮影 名鏡勝朗

第八卷
目次

第一部 絵の中で

ある芸術について 9

ルドンの「悪の華」 39

ゴッホとゴーガン 57

聖なるスキャンダル 83

シャガールについての三章 105

中国明清美術の栄華 121

阿部コレクション「中国絵画展」 131

外人の見た日本文化 135

ピエト・モンドリアン 155

ここに緑ありて 167

最後の作品 175

ロマン主義の落日 187

ロドルフ・ブレタン、シャルル・メリオン

「日本の文人画展」所感 245

モジリアニ雑感 255

異物 261

第二部 物の中で

やきもの 279

口絵 289

黒釉の造形 297

直しということ 305

双蝶譜 315

釜らしきもの 323

絵付二題 331

早春譜 341

伝統のゆくえ 349

白の発見 355

壺の表情	367
古銅の味一	377
古銅の味二	383
金環	389
供養仏念持仏	395
中古伝世	401
徳利と盃	409
硯と水滴	415
元禄の創意	423
残欠	427
唐津再見	433
仁王の手ほか	441

第三部 対話の中で

熊谷守一 457

岡鹿之助 485

岡田謙三 511

東山魁夷 533

香月泰男 559

駒井哲郎 581

横山 操 605

前田常作 631

第一部 絵の中で

ある芸術について

I

いかなる芸術家にとつても、幼少時代を送った土地が、なんらかの形でその芸術家の自己形成にあずかつて力があることは、べつに珍しいことではない。しかし、ルドンにとつては、それは単にそれだけのことではない鮮かな意味をもつ。その名を、ペイルルバードという。フランスのボルドーの西北、ジロンド川が入海となつて大西洋とまじわるあたりに、左右を海にかこまれた三角地帯がある。レスパール・ルメドックと呼ばれる地方だが、ここにある小さなブドウ栽培地がそれである。

ベルトラン・ジャン・ルドン通称オディロン・ルドンは、一八四〇年四月二十二日、当時アメリカのニュー・オルリーonzから帰国早々の一家の次男として、ボルドーで生れると、まもなくこのペイルルバードの母方の叔父の家に里子に出された。そしてその後十一歳までをこの地で過した。

彼の父ベルトラン・ルドンは、ボルドーのかなり裕福な中産階級の出であつたが、

ナポレオン治下の大陸封鎖のあおりで急速に傾いた家運をたてなおすために、若くしてニュー・オルリーonzに渡った人である。はげしくきびしい性格だったが、一面、自然と冒険をこよなく愛したロマンティストでもあった。オディロン of 自然に対する愛情と夢みがちな神秘的性格は、たぶん to この父から受けた血にもよることである。彼は後年、この父について愛情と尊敬をもつて書いている。

それに反して、植民地生れの白人いわゆるクレオルで、一八三四年に現地でベルトランと結婚した母（マリ・ゲランといった）については、あまり多くを語りながらない。兄弟のうちでただ一人里子に出され、母親からうとまれたせいもあるうが、事実むら氣で、偏執的なほど愛憎の強い、教養の乏しい女性でもあったらしい。ここでついでにオディロン of 兄弟について一瞥しておくことは、まんざら無意味ではあるまい。兄エルネストは、父母 of 移民中に生れた子であるが、音楽の才にめぐまれながら長ずるにしたがつて無氣力となり、家事 of ブドウ栽培に従事することのみで終つた。母親 of 異常な偏愛にわざわざいされたのである。と同時にエルネスト自身、この母に対するコンプレックスに終生悩まされることになった。妹マリは早逝した。弟レオも医

学を修めたが、若くして世を去った。末弟ガストンだけは、のちに美術学校教授にもなった建築家である。その彼も幻想的な地下墓地の設計プランに偏執し（その一つで彼は《ローマ賞》を得た）、終生奇怪な死の幻影にとりつかれ、實際上の建築の仕事はほとんど残さないで終っている。

こういうふうに見てくると、彼ら兄弟には共通して、どこか病的な暗いかげ、無気力で退嬰的な何ものかがあったように見受けられるが（とくにガストンの場合は、一見岩乗で精力的な外貌に似合わずそうだった）、オディロンの性格の一面にもたしかにこうした点は見られるようである。しかし考えようによれば、そうしたオディロンにとって、父母のもとを離れ幼にして孤独のうちに育ったことは、むしろ後年の彼の芸術にとってさいわいした、という見方も成立とう。とくに、気まぐれで好悪のはげしかった母親の膝もとを、離れて暮すことができた点はさいわいだった。

ペイルルバードの孤独（それにしてもやはり年端もゆかぬ少年にとってはいささか早すぎた）は彼の心に、夢と現実に関する得がたい体験のいくつかを灼きつけること

になった。ルドンは後年、自分の芸術を語る場合、その内心の日記や手紙のなかで、しばしば「暗示的」ということばを使うが、これもその一つである。「当時そこ（ペイルバード）へ行くには、乗合馬車か、あるいは牛車にさえ積まれて、眠気をさそうような平和なろきで、単調な移動をしたものでした。しかし心は自由で目は活々と、風景の展開以外には眼中にないかのようになり、しずかにうっとりとして、車のベンチに寝そべっていました。その場で心を動かされるというようなこともほとんどなく、いわば暗示的な瞑想の状態にしっかりと捉えられて、揺られていったものでした」（『芸術家の告白』、傍点筆者）。この告白は彼の最良のパトロンであったオランダの蒐集家、アンドレ・ボンジェのもとに応じて書かれたものである。

ここには、与えられた自然に対して受動的になりながらも（この点はガストンやエルネストにも共通した特徴だった）、しかも時間の奥から輝き出てくる本質（それが一本の木炭、一本の線であることを、やがてオディロンは知るのであるが）を柔軟な心で待受けている、そういういわば耐えることを知った魂の孤独が、すでに顔をのぞかせていよう。そこからまた彼は、一步すすんでつぎのような発見をもする。「メド

ツクのブドウ畑と海とのあいだにある、私がいまあなたにお話しているその地方では、人は孤独です。かつてはこの荒涼とした空間を蔽っていた大洋は、その砂ばかりの不毛の中に、かすかな遺棄の、抽象の氣息をのこしていました」(同前、傍点筆者)。

ルドンが育ったペイルルバードのブドウ園は、一方に、瀟洒な家も建ち並び、伝統的なゆたかさをもつメドック地方と、他方に荒々しいランド地方の不毛の眺めが海まで延びている、そうした対照的な二つの地区の境にあった。この、つねに背反した風景が、少年の心に映った日常の眺めだったわけだ。こうした眺めが少年の目に「かすかな遺棄の、抽象の氣息」を感じとらせたとしたら、それは後年のルドンの芸術とも照しあわせて興味あることである。

これはやがて、一八九〇年から一九〇〇年にかけて、ということはずまり四十年の歲月のへだたりをそこに置いてということだが、線とアラベスクに対する彼の熱中となって現れてくるのである。ルドンには後述するように、レンブラントの明暗法に心をうばわれ、そこに生れるヴォリュームに心を凝したかなり長い期間があった(一八六〇年代の終りごろから八〇年代にかけて)。それが一八九〇年ごろから、しだいに